

エンジニアリングと哲学と愛に生きた巨人の息遣い

オーヴ・アラップ 20世紀のマスタービルダー

ピーター・ジョーンズ：著、渡邊研司：訳

建築に携わる者であればオーヴ・アラップの名と彼が創業した会社を知らぬ者はいない。世界40か国に13,000人以上のスタッフを抱える、言わずと知れた世界最大のエンジニアリングコンサルタント会社である。日本においてもトップアーキテクトを始め、優れた建築家たちがエンジニアリングパートナーとしてアラップ社を指名し、今日でも優れた建築を生み出し続けている。同社の理念である「トータルデザイン」とともに、

大組織でありながらも存在感のある個々のエンジニアが活躍している印象を受けるのも同社の特徴であり、その優れた作品群と合わせてある意味、エンジニアリング組織の一つの理想形を具現化しているとも思われる。本書は、今日にも続くそうした技術的足跡を無数に残した創業者であるオーヴ・アラップの知られざる膨大な日記、手紙、評論に、哲学思想研究者であるピーター・ジョーンズ氏が初めて焦点を当て、彼の内面を中心にその生涯を丁寧に紐解いている。

まず驚くべきは、よくぞここまで残っていたかと思われるほどのプライベートな日記や手紙の数々である。それは青年期の悶々とした葛藤を記した日記や、数人の恋人との仔細な手紙のやり取りに始まり、アラップが携わった名作にまつわる建築家との息詰まる応酬に至るまで、生々しいまでに人間アラップの息遣いが沁みこんだ文章が引用されている。果たして彼は、ここまで赤裸々に自分の日記や手紙が後世の人間に読まれることを想定したのだろうか。

1946年に創業してから一度の例外もなく拡大を続けたアラップ社であったが、「トータルデザイン」に代



東海大学出版部、A5判、583頁
定価 本体6,800円＋税
神奈川県平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7811

表される彼の哲学や民主的な組織の体制は、スマートにパートナーやスタッフたちと共有されたわけではなかった。経営者としての彼はときに「母親のお茶会さえ開けないだろう」と社内で評される一面もあった。しかし、一体何が彼の哲学的思考をかつてない優れた組織の形成に昇華させたかと考えるとき、その中心にあるのは、彼の行動とそれによって紡がれた物語の存在であろう。

その最大のものが、本書のクライマックスとして2章に渡り描かれているシドニーオペラハウス建設にかかわる物語である。コンペに当選した建築家ヨーン・ウッツォンに宛てたアラップの手紙から始まるこの物語は、純粋なまでに芸術性を求めるウッツォンと、ときにぶつかり合いながらも技術的解決をもって寄り添おうとしたアラップの熾烈なやり取りを経て、ウッツォンの退場、竣工後の世界的評価につながっていく。シドニーオペラハウスにまつわる17年間の物語は、何をつくるべきか、という根源的なデザインマインドにかかわる類い稀な事件であり、用強美の間での建築の永遠のテーマに歴史的な問題提起を残した。その歴史的な評価はいまだに議論が分かれようが、間違いなくいえることは、アラップとウッツォンという2人の人間を中心として紡がれた物語が、「伝説」と呼べるほどに哲学的な側面も、技術的な側面も、人間的な側面も併せもっていたからこそ人類史上に残る建築が完成し、その物語自体がオーヴ・アラップ・アンド・パートナーズという世界最高峰の技術者集団の礎となったのであろうと本書は思わせるのである。(きのした ようすけ)